

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

|                     |          |
|---------------------|----------|
| ■ 巻頭言               |          |
| 激動必至の国際情勢           | 2        |
| 八五春闘——情勢の特徴と課題      | 3        |
| 「整合性」論で方針案は一致       | 6        |
| ——春闘後退の真の背景         |          |
| 破綻した「整合性」論          | 8        |
| ——「整合性」論の本質         |          |
| 八五春闘と社会党            | 10       |
| ——全民労協路線のおちゆく先      |          |
| ◇ 投稿 ◇              |          |
| 春闘再生は「要求に自信」をもつことから | 14       |
| ——青年団結集会で考えたこと      |          |
| 向坂逸郎先生を語る           |          |
| 一人ひとりの努力が社会主義をつくる   | 関 光子 17  |
| 小学生のとき講演きく          | 布上 泰 17  |
| 向坂先生の「大書」           | 川原 虎雄 18 |
| 読者からのおたより           | 5        |
| 編集部だより              | 18       |

# 旬刊 社会通信

NO. 260

一九八五年四月一日

一九八五年四月一日  
(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■巻頭言■

## 激動必至の国際情勢

独占は不安でいっぱいだ。資本主義社会では、いつ何が起ってもけっして不思議ではない。まず国際情勢から。資本主義体制には、いま三つの脅威が現存する。

第一は、ドル・ショックの脅威である。ドルが異常高にあるからだ。レーガンは「アメリカ経済の強さ」が要因と強調する。これは正しくない。たしかにアメリカ経済は八三年末以降、その成長率は顕著である。インフレも終息したかにみえる。しかし、その背後には(1)一千億ドルを超える貿易収支の赤字、(2)一千億ドルを超える経常収支の赤字、(3)二千億ドルを超える財政赤字がある。

実勢を超えたドル高は、アメリカ経済の競争力を急速に奪いつつある。アメリカの輸出産品は農産物、武器、半導体等の先端産業であった。今やアメリカの農産物は急速に輸出競争力を失い、一九三〇年代以降最大の農業恐慌の状況にある。半導体に象徴される先端産業も過剰生産が顕在化している。さらに農業恐慌や中南米諸国の対外債務問題から商業銀行の動揺と倒産が第二次大戦後、最大の規模に達している。

三月二〇日、ドルが急落した。そして金価格が三五〇ドルに接近するまでに騰貴した。アイオワ州の一商業銀行のとりつけ騒ぎがその原因だという。だが、この事件の前日、アメリカが純債務国に転落したことが明らかとなった。いよいよドルへの「信認」が揺らぎ始めたのである。

第二は、発展途上諸国の政治的動揺、政治不安の高まりだ。政治不安の最大の要素であった八千億ドルを超える対外債務問題は、アメリカ経済の成長とIMFの介入によって「克服」されたかのように伝えられる。これはさらに大きな矛盾を準備するだけだ。

世界最大の債務国ブラジル、メキシコ、アルゼンチンで八四年以降、予想以上に国際収支が改善されている。「対外債務」問題、国際金融危機「回避」の最大の要因だ。だが、ブラジル、メキシコ、アルゼンチンはどうやって国際収支を黒に変えたか。緊縮財政による犠牲の労働者・勤労諸社会層への転嫁、そしてアメリカの一千億ドルを超える貿易収支によるものだ。こんなことはいつまでもは続かない。かならず破綻する。ドルが急落するとき、「対外債務」問題は再び燃え上がる。

そのとき、世界経済は恐慌状態におちいる。経済戦争は激化する。おそらく、世界経済の收拾はかつてなく困難な事態に直面しよう。それとともに、発展途上諸国の政治的動揺、不安も高まろう。

第三は、中ソ和解の進行である。「吊問外交」ではソ連が中国とかつてない高いレベルで交渉を続けるだろうことが明らかとなった。アメリカも「それは折り込み済み」と強がりの声明を発表している。現在、中ソの交渉は(1)中ソ国境の兵力、(2)カンボジアからのベトナム撤兵、(3)アフガニスタンからのソ連の撤兵が残されている。この三つの問題は事態の進展とともに解消の方向に向うだろう。

こうした状況は「不沈空母」日本に急激に波及する。アメリカによる「防衛力強化」の圧力はさらに強まろう。独占にも世界最大の資本輸出国の一つとなり、「権益」となったアジア諸国の政治的「安定」をはかるため、「防衛力強化」の道を邁進することは必至の情勢だ。かくして、国際情勢、国内情勢の階級矛盾は激化するのである。

## 八五春闘——情勢の特徴と課題

### 基礎体力をつくる

全労協傘下組合は、八五春闘も「決戦段階」と、日程づくりに精を出しています。今年には「三梯団方式」をとるといふのがその構想です。四月第二週（四月十一日）に力点を置き、三月下旬から四月初旬を第一段階に、そして四月の第三週に（1）先行集中決戦をつうじて未解決の組合、（2）中小労組、（3）官公労の三グループが最後にたたかうというものです。

これではたして「ストなし」発回答「管理春闘」を突破する足がかりができるのかと疑問ばかりがでてしまいます。しかし、嘆いているだけでは、反撃の準備をすることはできません。全体が重ければ重いほど、機関車は石炭をくべ、カマを大きくし、ヨリ強い馬力を必要とするからです。

現在、労働運動の燃料は蓄積されはじめています。火をつけることはけっして容易ではありません。まだまだ時間がかかるだけに、私たちがしっかりシコを踏み、基礎体力づくりに励むことが必要です。

### 八五春闘—五つの特徴

八五春闘をめぐる情勢の特徴は五つあります。

第一は、行革・臨調攻撃下の春闘だということです。行革は公労協・公務員労働者だけにかげられたものではありません。民間労働者への攻撃でもあります。ですから、「反行革春闘」としてたたかうことが何よりも重要です。

独占は国家権力のかぎりをつくし攻撃しています。ちょっと目には独占は強いようにみえます。しかし、敵は「攻撃は最良の防禦」と攻撃していることをつかむことが重要です。さらに、「行革」は犠牲を勤労諸社会層に転嫁しています。「行革」の矛盾はだれの目にも見えるようになっていきます。「行革」攻撃は、逆に「体制」のもつ矛盾を進化させるのです。「行革」によって、どんなかたちで矛盾が職場、生活、社会、経済、政治の面であらわれでているか。これをしっかりとつかみ、仲間の意志を結集することが大事です。

第二は、国民生活「窮乏化」下の春闘だということです。今年ほど労働者生活の窮乏化が声高に喧伝されたことはありません。私たちの懐は寒くなるにつれ、企業の懐は暖かくなっていきます。賃労働と資本は対立することのなにより証明です。これについても後で具体的に検証しますが、これによって、労資協調—その実態は労資ゆ着といった方が正確ですが—の基盤をなしていた、生産力の発展による生活様式の変化からもたらされた「中流意識」が幻想にすぎなかったことが生活によって暴露されはじめたことが重要です。

第三は、すでに述べた（一）（二）と関連することです。「行革」に際して政府・独占は財政再建を強調しました。増税なき、財政再建達成のためだと。しかし、こんにち増税なき財政再建は破綻したということなのです。つまり、大衆増税は必至ということなのです。

「行革」による矛盾はすでに顕在化し、国民生活は「窮乏化」の一途を辿っているうえに、大衆増税がのしかかってくるのです。「窮乏化」と②現象はさらに全面化します。これが八五春闘以降の生活現象です。

第四は、政治的にも矛盾は激化し、憲法体制と軍事大国化の衝突もこれまた必至のものにおける春闘であることです。周知のように、今国会では「一％」問題が最大の焦点となりました。野党の追及の弱さが、中曽根のこの問題にかける意気込みをさらに強いものにしていきます。

「一％」問題は将来、どういう問題をもたらすのでしょうか。憲法の理念と現実の対立です。憲法改正への論議は必至になります。あいまいな表現、ごまかしは限界になるからです。

こんにち、軍事問題を専門にあつかう人びとの間にも、「日本経済の軍事化、軍事大国化を過大に評価するのは危険」との意見があります。しかし、こうした見方こそ危険です。日本の経済の状況は第二次大戦前の「大東亜共栄圏」時代よりも、はるかに強化されているからです。東南アジア、東アジア、近東の国々には、日本独占にとってすでに「権益」と化しています。軍事関連技術はアメリカをしのいでいます。ハズミがつけば、日本は「軍事大国」を一挙に実現できる経済的、政治的基盤をつくり終えています。実態は第二次世界大戦前の比ではないということです。

遠からず「憲法改正」の是非をめぐる国を二分した論議が、独占・政府自民党によってもたらされるでしょう。今春闘は、将来の日本の岐路をなす春闘ということです。

第五は、そうした状況下でありながら、わが労働者階級の総司令部たる総評・社会党の後退化の春闘だということです。あとで詳しくみるように、社会党が全民労働者支持の姿勢を明言したこと、総評が最後の「一線」である「五項目補強見解」をタナ上げることがその象徴です。

「五項目」放棄の意味について左派の間にも正しい認識が欠けています。これによって、総評は「全野党共闘」路線を投げ捨てたのです。社会党がこの総評路線を支持し、全民労働者支持を運動方針で打ち出したことは、社会党も「全野党共闘」路線を捨てたことにつながります。当然、理念としては「社公」が掲げられるでしょう。しかし、「現実的」には、自民との連立が模索されずにはおかないでしょう。「政治の流れを変えることが大事」と。このように、総評路線の転換と社会党の路線は「双生児」と見ておかなければなりません。こうした総評・社会党の右傾化も見方を変えれば、反撃の条件をつくり出してくれていることです。維新前夜の松陰、玄瑞、東行の心意気をわれわれのものとするという意味です。つまり、私たち一人ひとりが幹部をあてにするのではなく、「未来を切り拓く力はわれわれにかかっている」との自負と気迫をもつことです。こうしてのみ、総評労働運動の再生、社会党強化は達成できるのです。

#### 自分の頭で方針をつくる

以上述べてきましたように、現状は必ずしも私たちに明るいものではありません。指導部が指導部の役割を果たさず、われわれもまた日常活動を精いっぱいいたたきたい、必ずしも反撃への足腰強化を準備していないからです。

現況は「一発満塁本塁打」はないということです。塁に走者はなく、バッターはへっぴり腰だからです。速球にバットが空振りのありさまだからです。ですから、いま必要なことは速球にバットをあてること、つまりくらいつく気迫を職場労働者全体のものとする努力です。基礎体力づくりです。トレーニングです。もっとも時間がかかり困難な作業です。

これをやりぬくことです。

かつては総評、社会党の方針にもとづき、それを補強することで可能でした。しかし、こんにちでは不可能です。これから述べるように、総評も社会党も階級的路線への自信を喪失してしまつたからです。たよりになるのは自らの頭で考え、工夫し、情勢をしっかりとならえ、そのうえで自らの肩に頭をしっかりおき学習を、日常闘争を全力をつくしおこなうことが問われているのです。これが、八五春闘全体をおしての課題です。

### 八五春闘の二つの課題

以上述べたことから明らかなように、八五春闘の具体的課題は大きく二つです。

第一は、「窮乏化」の実態を明らかにし、賃金を中心に春闘再構築に全力を上げることです。

第二は、「行革」と春闘を結合することです。このとき、とりわけ重要なことは、国鉄闘争との連帯に全力をあげることです。国鉄闘争のゆくえが日本労働運動の盛衰と不可分だからです。

よくこういう意見を耳にします。「国労は大国主義だ」と。私もそう思います。しかし、これだけ国労がタタかれて、職場に目が向き、必死にたたかっているとき、外に目が向くでしょうか。困難だと思います。だとすれば、私たち「外部」の人間の役割は、自ら国労の仲間を足運び、「大国主義」、つまり「企業主義」の克服とともに考えるべく条件整備に全力をあげることではないでしょうか。

### ◇ 読者からのおたより ◇

毎号、楽しみにしています。厳しい闘いの中で、非常にくだげられますが、本誌の闘いの中での記事には、いつも励まされています。

これからも「労働者の階級的立場」を常に検証しながら頑張ります。(神奈川県・G)

向坂先生がなくなれば非常に残念です。先生を知ったのは、友人からすすめられた労大の「三池と私」でした。今では、先生の本を集めようと、ヒマをみつければ古本屋通いで。(大阪・O)

次から次へと「仕事」が提案されています。先日は「加入者訪問」を全職員が全加入者を対象にやりました。「公社から株式会社」に四月からなります、よろしく」と。次には何がやってくるのでしょうか。

「労働者の団結を」でなく、「競争」「自己責任能力」という意識にさせられています。

私自身も、何から始めるべきか、何が不足しているのか等が不十分です。(松山・S)

(全通のある地域区分局)事業危機論にもとづく「翌日配達制度」について、支部や分会の表面上の指導(と言います)も、彼らも「本当にこれで良いのか」と悩んでいるからです。「全通全体で選択した道だから、やむなし」「翌日配達制度を認めた上での労働者の要求の前進を」となっていますが、一人一人の組合員の本音は、「こんな制度を認めるから、夜間労働が多くなり、体もきつくなるんだ」という事です。今本音を少しづつ「組織」しています。(新潟・W)

## 「整合性」論で方針案は一致

——春闘後退の真の背景——

前章で、八五春闘の特徴として総評労働運動後退下の春闘であるといいました。総評労働運動の後退の原因はどこにあるのでしょうか。以下、簡単に検討してみます。

### 同盟・J.C.・総評

まず、総評の路線へのアンチテーゼとしてつくられた同盟・J.C.の特徴です。

同盟の八五春闘の位置づけは、「五多台中成長路線定着の基盤を形成」「二〇年間に実質可処分所得を五割引き上げる」というものです。いわゆる「経済整合性」論にたっています。こうした立場から統一要求基準について、(1)要求基準 七%・一万四、〇〇〇円(定昇別)、(2)個別賃金 三五歳Ⅱ勤統一七年 二四万一、〇〇〇円、(3)協定最賃 九万七、〇〇〇円としています。統一要求基準はJ.C.、総評もまったく同じ内容です。

同盟の賃金要求の特徴は、従来の「物価+ $\alpha$ 」から「実質賃金引き上げ」へと「要求基準設定の重点課題を転換」していることです。その理由を「白書」はこう述べています。

「だれでもこれだいたいと思わないままに十年が過ぎてしまったこの間、勤労者の生活には賃金をはじめ家計や雇用に大きな悪循環と矛盾が生じた。…今必要なのは生活改善の遅れを悲観することではなく、矛盾や悪循環を克服して新しい生活向上展望の礎石とすべき動きをそこから見出していくことである」

④現象がいちじるしいことへのイラダチを示すものです。こうして、同盟の「白書」は「低成長への逆戻りか、生活向上展望の条件構築か、八五賃闘はかつてない重要な岐路に立った闘い」と、規定しています。

総評の「白書」も同盟のそれに似ています。まず、「位置づけ」ですが、それは、「つぎの新たな中成長を展望しうる局面への移行を確定しうるかどうかの節目」というものです。統一要求基準は同盟とまったく同じです。その認識は「賃金の改善立ち遅れが日本経済にゆがみ」「賃金引き上げが、国内需要を拡大し、日本経済の持続的成長をもたらすカギ」というものです。

J.C.の場合、「八五年以降わが国経済が中成長・安定軌道に乗ったと即断することはできない」との認識のもと、「中成長・安定軌道にのせる」「国民経済との整合性」「金属労働者にふさわしく、生活を質的に高める」ため、要求基準として総評・同盟と同じ七%または一万四、〇〇〇円が提起されています。

### 統一労働懇は「国民春闘再構築」

他方、共産党系の統一労働懇は、総評以下のナショナルセンターが足並みをそろえたからでしょうか、「国民春闘再構築」を前面に掲げていることが特徴です。

具体的には(1)労働者・国民の生活状態の深刻化、(2)行革・臨調、政党法、国家機密法による反動化、(3)反撃の条件の拡大を「基調」に掲げ、「目標」としては(1)労働者生活の擁護、(2)国民春闘再構築、(3)「四つの共同」の追求、(4)反戦・平和も結合、(5)統一労働懇機能の強化を強調しています。

統一労働懇の方針で注目されるのは二つあります。第一は、総評を刺激する発言が少な

くなつたことです。ハッキリ従来の路線が変わつたわけではありません。しかし、「総評の解体は必至」との判断のもと、より現実的に統一労組懇機能の強化を追求しはじめたことです。つまり、「総評の旗」をわれわれはただ、そのためには統一労組懇の組織強化しかない。

第二は、反撃の条件の拡大ということで、「行革」がもたらしはじめているさまざまな矛盾に注目し、注意を喚起していることです。

### 「白書」の特徴・共通点

かくして、ナショナルセンターの「白書」の特徴は次のように結論できます。まず共通点についてです。

第一は、総評の右傾化がよりいっそう進んでいることです。「白書」を貫く考え方が完全に「整合性」論となったこと、その結果、総評の「白書」が同盟・JC路線にさらに接近していることです。統一要求基準にみられる要求の「統一」はその結果です。

第二は、時短に賃金以上のウエイトがおかれていることです。(1)週四〇時間・完全週休二日制、(2)年間総労働時間二〇〇〇時間以内、(3)年末・年始、太陽と緑の週、夏休みの三大連休の実現、(4)年次有給休暇の完全取得、(5)残業規制と残業割増率の大幅値上げというのがその内容です。

次に特徴点についてです。

第一は、同盟・JCは実質賃金向上を強調していることです。彼らは「整合性」論にもとづく賃金要求を目指してきました。その結果、労働者生活は②の一途を辿っています。さらに、そうした路線の当然の帰結ですが、組合の組織率は低下傾向を示しています。

「このままでは組織がもたない」との彼らなりの危機感のあらわれです。

第二は、そうしたことの結果、同盟は要求基準設定の重点課題を転換していることです。

昨年までは「物価プラスα」でした。今年の「白書」では「実質賃金引き上げ」が前面に掲げられました。

第三は、くり返しになりますが、総評が同盟・JCを後追いしていることです。

第四は、統一労組懇だけが形式的には「国民春闘再構築」を前面に掲げ、総評の従来の闘争方針を継承していることです。

### 弱点克服一二つの途

簡単に、ナショナルセンターの春闘方針の特徴をみてみました。やはり総評指導部のだらしなさが目につきます。拡大評議員会、臨時大会で中小単産、地方総評から「総評らしさをとりもどせ」「行革とも真正面からたたかえ」「中小単産のたたかいを強めろ」と積極的な意見が相次いでいるだけに、総評指導部の動揺は克服されねばならないのです。そのためにはどうするか。

二つあります。一つは理論的弱点を克服することです。生産性基準原理に屈した「整合性」論を理論的、思想的に打ち破ることです。二つは、実践的に大衆運動をつくりあげることです。この二つの闘いをつうじてのみ、総評の路線の動揺は克服でき、総評再生の芽をつくることのできるのです。

# 破綻した「整合性」論

——「整合性」論の本質——

独占資本のホンネ

かなり前になりますが、日経連・大槻会長が「毎日新聞」とのインタビューで、こう答えていたことが記憶に残っています。「内需拡大で安定成長が必要では」と問われたときのものです。

「(内需型経済にしなければいかん)」という人もいるけれど、経営を預かっている以上、企業が永遠に続くよう努力する責任がある。従業員の生活に対する責任もある。理屈はわかるけど、ハイそうですかとはいかん」(「毎日」八五年一月一五日)。

これが現代の資本家階級である「経営者」「重役」の考え方です。資本の「神官」としての彼らの本質をものごとくに映し出しています。独占が一九七〇年以降、なりふりかまわず浸透をはかった「生産性基準原理」の考え方もあります。

「生産性基準原理」の宣伝の本質は洗脳でした。とりわけ労組幹部の洗脳です。「企業なくして労働組合はない」「企業なくして雇用はない」「なにがなんでも企業の存続を守らねばならん」という考え方への誘導です。

かつて田中逮捕直後、当時の日経連会長・桜田老人は、「職場に安定帯があって、官僚、裁判所、警察がしっかりしておれば少々の政治的危機は乗り切れる」と、戦略を披歴しました。独占の社会的責任は剰余価値、利潤の獲得です。そのためには、「合理化」を進めることが彼らの死活の問題となります。「合理化」に協力する労働組合、労働者をつくり出すことこそ、彼らの至上命題となるのです。そして、このために利用されたのが「生産性基準原理」です。

## 「生産性基準原理」とその定義

「生産性基準原理」を独占はこう定義しています。

「賃金問題に関して、常に注意し、その排除に努力しなければならない点に、物価スライドによる賃金決定がある。経済成長の前提として、物価の安定があることは、今日常識となっているが、物価スライドによる賃金決定は、ひとたびインフレが何らかの原因で起こると、それを永続的なホーム・メイド・インフレ(国内要因によるインフレ)として国内経済に組み込んでしまう弊害を持つ。その結果、主要国の中でも物価スライド制を持つ国は、高いインフレ、低成長、高失業率に悩んでいるのである。

日経連は、こうした見地から、生産性基準原理による賃金決定を唱導し続けている。この原理は、マクロの賃金上昇率を国民経済の実生産性上昇率の範囲内にする場合、ホームメイド・インフレ率はほぼゼロに近づくとの論理に立つ。この場合、賃金上昇率というのは一人当たり年間総額人件費の増加率のことであり、国民経済の実質生産性上昇率というのは、実質GNP成長率マイナスイナス就業者増加率のことを意味する。現実的に労働組合との間に賃金の交渉をする個別企業にあっては、その企業の支払い能力が中心となるのであろうが、マクロの見地に立って生産性を基準としたこの原理を忘れてはならない。このようにして賃金決定が行なわれるとき、わが国のインフレは最小限に抑えられ、安定成長への基盤が定着し、ひいては実質賃金の向上をもたらすであらう」(「八二年版・労働問題研究委員会報告」、一七―一九頁)。

つまり、賃金を低く抑さえるための屁理屈です。この屁理屈は、例の「賃金・価格・お



よび利潤」でマルクスが批判して以来、一貫して資本家階級に歌い継がれています。資本主義社会であるからです。

#### 「基準原理」をめぐる二つの論議

今年はこの「生産性基準原理」について面白い論議が展開されました。鉄鋼労連・中村委員長と日経連副会長・鈴木氏とのやりとりです。

「生産性基準原理」で賃金は上がったのでしょうか。否です。全民労協の資料では過去一一年間物価は二倍になったのに、賃金はマイナス四・五%との数字があるほどです。鉄鋼労働者はもちろんマイナスです。そこで中村氏は日経連に「古びた、すり切れたレコードで歌をうたうのはやめよ」とかみついたのです。

これにたいする鈴木氏の反論がふるっています。中村は階級協調を求めたのに、鈴木は階級対立をこう主張したからです。

「あの歌はまさしく名曲。年末になると聞かえてくるベーターベンの第九のように、名曲は時代をこえて歌い継がれるものだ」

ものわかりのよい労組幹部はマルクスとレーニンがことの他きらいです。マルクス退治をやるためには、資本との共同闘争をいといません。その資本家は約百数十年前のウエストン君、ラッサールと同じことを言い続け、歌い続けているというのにです。

#### 「生産性基準原理」の歴史的性格

「生産性基準原理」の「新しさ」はどこにあるのでしょうか。資本主義の危機の時代の独占の「賃金論」だということですが。

私たちは、資本の「賃金論」として、(1)「生産性・賃金論」、(2)「賃金・物価悪循環論」、(3)「支払い能力論」があることをすでに知っています。いずれも賃金(労働)と資本の階級対立を隠蔽するまやかしの理論です。

資本主義社会では必ず景気は変化します。好況があれば不況があり、大恐慌がおこります。独占たちはこの景気変動に応じてさきの三つの「理論」を使い分け、賃金引き下げに全力をつくしてきました。すでに、私たちが経験してきたところです。ウエストン君の例を再びとりあげるまでもないことです。

さきの「生産性基準原理」の定義は何を示しているのでしょうか。三つの「理論」の雑炊であることです。つまり、独占たちは個々の「理論」では対応不能におちいったのです。これが「生産性基準原理」という屁理屈を考え出さねばならなくなった最大の理由です。

#### 「生産性基準原理」と「整合性」論

この「生産性基準原理」に屈した労働組合の「賃金論」が、「経済整合性」論と呼ばれるものです。これまで同盟やJC組合が唱えていたものです。最近、この考え方に総評が合流し始めたことが、日本労働運動の危機の根本原因になったのです。

「整合性」論にも二つの流れがあります。同盟のようにナショナルセンターとして「日本経済との整合性」を強調するもの、もう一つは鉄鋼労連に代表してみられるように「鉄鋼産業との整合性」を強調するものです。前者はいずれ「愛国的労働運動」に、後者は「労資運命共同体」に途を開くことになるでしょう。根っ子は同じということです。

この「整合性」論の破綻も全民労協の誕生とともに明らかに始めました。企業の懐は暖かく、労働者の懐は寒くなる一方だからです。中流意識、中産階級論への幻滅が予想以上に進行しはじめていることは、それを示すものです。

# 八五春闘と社会党

—— 全民労協路線のおちゆく先 ——

## 社会党大会の教訓

こうした労働運動の流れとともに、社会党の動向も重要です。社会党大会では「ニュー社会党」の正しいモデルが示されました。原発容認の本部方針を修正したことです。特筆すべきは、この問題に全国の党員が派閥に關係なく危機感をもって立ちあがり、「中執統一見解」を勝ちとったことです。（詳細は本誌第二五五号、第二五七号を参照）。この壮挙から何を学び、実行するかが社会党の右傾化を阻止するうえでもっとも重要です。本誌第二五五号（二月一日）で指摘した意義と教訓を再度かかげておきます。

「第一に、この十余年の間に原発に反対する闘いは、事実によって正しさが証明され、関係原はもとより、国民の信頼をつなぐ先見性ある正しい方針は、当初は国民の比較的小数にしか理解されず、必ずしも現実的に見えなくとも、闘いの発展の中で正しさが証明され、年月とともに多くの国民の支持を獲得する現実的な方針となりうることを、必要なのは公民の政策へのすり寄りではなく、他党もこちらに近寄ってこざるをえなくなるような闘いの強化であり、そのためには動揺することなく正しい方針を堅持する必要があることが明らかとなった。

第二に、各地方の職場と地域の闘いを、原対協（社会党原発対策全国連絡協議会）のように、横につなげて意志を結集すれば、他の課題においても党の方針や政策は、労働者をはじめとした勤労国民大衆の切実な期待を担う方向に民主的に修正できることが示された。

第三に、路線論争において、抽象的な論議のみではいずれが正しく、いずれが誤りであるかが分かりにくいという面があるが、具体的な課題を通じて解明に論議を進めれば、路線の重大さも明らかになり、日本における科学的社会主義への道を事実上継承し発展させることも不可能ではないという展望も不十分ながら切りひらかれた」

原発問題にみられた条件は、今後、拡大せずにはおきません。「行革」は、「麻酔なしで手術する」（稲山経団連会長の発言）に他ならず、「痛み」が全国的規模でおおうことは必至だからです。ですから、「朝日」一月二一日付の社説も、ついでに本音ももらしているのです。

「原発反対と並んで多くの代議員が訴えたのは、反行革闘争の強化、とりわけ国鉄の分割・民営化に対する反対運動の強化であった。……しかも社会党は十二月の次期大会で新宣言を策定することになったが、このスケジュールは国鉄問題と重なってしまう」

このように、社会党大会は前進への貴重な芽を生み出しました。しかし、指導部は残念ながら右傾化への流れを強めています。ここでは、労働運動の部面にかぎりを報告します。

## 全民労協支持の意味するもの

焦点は全民労協への党の方針です。支持の方向を打ち出しています。方針案「第二部各局活動方針」にはこうあります。

「(1) 労働戦線の大同団結と官民の全的統一を支持し、協力します。

総資本の壁をうち破るためには、総労働の大同団結が要請されています。党は、労働戦線の統一、官民の全的統一を支持し、その実現に協力していきます。労働組合の政策・制度要求運動がさらに前進していることを背景に、全労働者共通の政策・制度要求の実

現のため、労働四団体および全民労働と協力して闘いの輪を広げていきます。全民労働を中心とした民間の労働戦線の統一を支持するとともに、官民の全的統一の実現に協力していきます」

全民労働の本質については今ではくわしくいう必要はありません。彼らの目的は四つあります。第一は、政・官・財・労一体の参加型労働運動です。第二は、体制擁護の整合性春闘です。第三は、保守・中道連合の基盤づくりの追求です。これによって、政界再編を意図していることです。第四は、国益擁護の労働外交の展開です。以上の彼らの目的は政府・独占の戦略に完全に合流するものです。

こうして、全民労働を支持することは、社公民、あるいは自民との連立、社会党の「解党」に手を借し、労働運動の産報化をつうじて大政翼賛会への危険性をもつのです。

大会討論での労働局長の答弁は、まさに常軌を失したものでした。「全民労働は、私鉄総連が入り、全電通が入り、全専売が入れば、同盟よりも総評に近くなる」と、こう述べているからです。

「次に全民労働と総評の関係です。ご承知のように全民労働はまだナショナルセンターになっていないわけですが、総評も含めて労働戦線統一の一つの拠り所、民間先行の労働戦線統一の母体になりつつあることは否定できないと思います。そこで全民労働の性格について若干ご理解をいただいておかなければなりません。(全民労働は)五〇〇万を越すゆるやかな組織になっておりますけれども、今回の電々の民営化あるいは専売の民営化が、本年四月から実施されていけば、それらの労働組合もまた全民労働に加盟しますし、またわが党の支持の集中的な組織である私鉄も全民労働に加盟しているわけです。従って今全民労働の内容はむしろ総評に近いと申し上げてもいいのではないかと思います」(月刊社会党「第三四八号、二三五頁」)。

さらに、石橋委員長の記事を見「朝日」(一月二〇日付)での発言も見過すこととはできません。そこでは、全民労働に依拠して「ニュー社会党」への脱皮をさらに急ぐことが明言されているからです。

「ニュー社会党への脱皮を急ぐのは、今の労働戦線統一の動きを認識しているからだ。労働統一は民間先行か、総評を含めた全的統一か、分かれ目。社会党は、勤労国民に根ざす以上、労働運動の流れがどこにいくのか、つかんでおかなければならない。政策を誤れば私が辞めればすむが、(時代の)流れを見誤ると、取り返しがつかないことになる。民間の意識を右傾化よばわりするだけですむのか」

石橋委員長らしい発言です。「時代の流れ」が右へ右へと動いているから心配するので「正しい」ことをだれがいうのかと。社会党以外にだれがいえるのでしょうか。共産党には全国民を結集する力はないのです。だから、社会党がキッパリと全民労働の路線がもつ本質の危険性を指摘して欲しいのです。自覚した労働者、中曽根の反動性に危惧をもつ学者・文化人もそれを望んでいるのです。

### 政界再編への「起爆剤」

全民労働のもつもう一つの特徴は、政界再編成です。労働運動再編成は政界再編への「起爆剤」との認識です。そして、もっともハッスルしているのが全電通と電機労連です。背景は産業再編成です。これまでの産業の「コメ」は鉄鋼でした。JCで鉄が力を持ち一発回答への主役となったのはそのためです。しかし、今や産業の「コメ」は半導体になりました。情報・通信産業がそのにない手です。ですから、電機や全電通は「二十一世紀の主役はおれたち」と、労働運動の主導権をにぎるため、おおいにハッスルしているのです。歴史的な事情もあります。政党支持の問題です。多くのJC・同盟系労組は民社一党支

持です。鉄鋼労連もそうです。電機労連は中立労連の主力組合ということから、いまだに一党支持をもっています。ケース・バイ・ケースで処理しています。他方、全電通は「社会党支持を軸とした反自民・非共産の連合の路線を堅持する」としています。彼らはいわば新興勢力です。それだけに失うものが少なく身軽です。ですから、全労協の連合移行で「既成のナショナルセンターは解体せよ」「社会党と民社党は歴史的妥協を」と、突っ走ることができのです。具体的には、「社会労働評論」八四年一二月で示された動きです（本誌、第二五四号参照）。

#### 電機労連の方針にみる社会党問題

最近の電機労連の動きにみることにします。ポイントは二つです。第一は政治連合のあり方、第二は社会党への彼らのみかたです。

第一の点について、電機労連は社公民から自民との連立へと変化しました。薬科委員長は機関紙「電機労連」二月一二日付で、大胆な発想が必要」と、こう述べています。

「（連合の時代という）場合、自民党も含めるのか、野党のどういう組み合わせで連合をはかるのかいろいろ図式が考えられると思います。私たちは、原則的に社公民路線を念願してきました。その原則は大事にしたいという考え方である一方で、最近の各野党の対応をみると、我々の理想論とは別にそこに到達する手段は、もっと弾力的で、大胆な発想も求められている」

「例えば、公・民が社の路線転換を前提に社公民を期待していたが、今の社会党の政策路線ではそれは無理でしょう。そういう情勢下で、社会党や社会党を支持する労組が社公民といったところで空論になりかねません。私たちは、原則・理想を片方でもちながら、現実対応として、もっと大胆な発想や組み合わせを論議できる弾力性をもっていると思います」

第二の社会党問題については「大胆な脱皮と再生に期待」と、さらに露骨です。二月二日、電機の中央委員会でもこう述べています。

「一昨年来社会党が内外の情勢変化に対応して『ニュー社会党』という現実対応路線に転換しつつある努力に対しては、心から敬意を表する。

特に、当大会において歴史的な基本路線からの脱却と再生を目指し、その第一歩を踏み出したことは政権指向の動機づけからみても大変意義のあることである。しかしながら一方でその裏づけでもある政策の転換を意図した中期の、経済政策の面においては、執行部原案が大幅に修正を余儀なくされたことは誠に残念なことであり、ある面で党の改革がなお容易でないことを浮きぼりにした。

もとより社会党が環境保護や緑の政党といったイメージを継承し、地方住民の立場にたった運動を展開することは大切なことであるが、他方で政権を指向し他野党とも連携をはかるべき責任政党としての自覚を持つとすれば、当然、中・長期の経済政策、エネルギー政策など具体的な政策の裏づけをもたなければ、多くの国民への理解と説得力をもつことはできないと思う。この大会を契機にして、エネルギー政策などの討議が真剣かつ前向きにすすめられることを期待すると同時に、わたし達はその動向推進に重大な関心をもっていることを付言しておきたい」

つまり、「社会党が大会で歴史的な基本路線の転換を指向したことは高く評価。一方で原発などの原案はいちじるしく後退。これからの連合政権は、社会党自身がいかに弾力的に幅広く顔を向けられる政党に飛躍できるかが大きなポイント」というわけだ。

「ニュー社会党」に、こうした思惑も入りまじっていることを正確にみておくことが必要です。

## 同盟は「産報」化？

社会党が全民労協に組み立てはならぬ典型的な事件が最近二つおこりました。一つは、一月二四日、中曽根首相が同盟二〇周年のレセプションに参加したことです。会場で中曽根氏はこう述べています。

「二十周年を機に、自由にして民主的な運動の中核体として運動を進めてほしい。私ができるのは変だという人の方がおかしい。隣の家のお祝いに行かないことはおかしいこと。労働組合にたいする信頼の目を開いてくれたのは同盟。日本の復興と繁栄は労働双方の力によるものだが、労働界の献身と勇気で繁栄がもたらされている部分も大きい。これはお世辞ではない」

これにたいし、宇佐美同盟会長もこうあいさつしている。

「資本、労働、経営の三者が力を合わせてこそ、経済発展がある。戦後の経済復興の過程で労働組合も精いっぱい役割を果たしてきた。(今後)歴史をみつめ、新たな時代に挑戦していきたい」

第二は、この宇佐美氏が、「新たな時代への挑戦」の中味を具体的に示してくれたことです。宇佐美氏は昨年二月の同盟中評で「ナショナルセンターの解体も考えねばならぬ」と述べたほど熱心な労戦再編論者です。その彼が二月二日、「建国記念の日を祝う国民式典」に出席し、「建国記念の日を祝い、天皇陛下のご長寿を祈って」万歳三唱の音頭をとったことです。同盟といえども、さすがに驚かされたのでしょうか。批判が噴出しています。ところが宇佐美氏は反省の気配をまったく示しておりません。「建国記念日を軍国主義との批判もあるが、そんな実態はない。建国記念日を祝えない労働運動では国民から信頼されない」「愛国心は必要」と居直っています。二月二八日、宇佐美氏の出身単産であるゼンセン同盟中央委員会で、「率直な気持ち」をこう語っています。

「昨年までの式典は宗教色の濃いものだったが、今年からは国民各階級層が祝える式典にしたいという趣旨で労働界にも参加要請があった。国民として当然のこととして出席を決定した。労働界からは初めての参加だが、何か重要な役割を果たすほうがよいと考え、万歳三唱の音頭が決定した。音頭の言葉についても論議があったが、運営委員会が協議の結果、ご存じのとりの音頭となったわけである。

ただ、建国記念の日について軍国主義化との批判の向きもあるが、私はそんな実態は全くないと考える。進歩的文化人といわれる人の批判も実態とはまったく異なっている。労働組合としても、ただそんな言動にまどわされ、建国記念の日を祝うことができないような労働運動では国民から信頼されないと考える。愛国心を持つのは国民として当然のこと、愛国心がなければ、国の安全保障なども空論に終わる。国の象徴である天皇陛下の長寿を祝うことも、国民として当然のことと考える。愛国心が悪いものという考えがあるのなら、その労働運動はいびつなものになってしまふ」

同盟指導部は「愛国的労働運動」への道をまっしぐらに歩みはじめたようです。産業報国会とどこがちがうのでしょうか。どうしてこのようなことを平然といい恥じることはない幹部と総評、社会党はいっしょにやるのでしょうか。

世論が右へ右へと流れているからこそ、総評、社会党はキゼンとした態度が必要なのです。同盟やJCCの幹部たち、民社や公明の幹部たちが「脳軟化症」の症状を示しはじめただけに、社会党にとっては逆にチャンスです。時流におもねることなく、キッパリ真実を語ることです。そして、不安や不満や苦悩に呻吟している勤労諸社会層にとびこむことです。「行革」による矛盾の激化はさらにその条件をつくり出してくれるはずで

## ◆投稿◆

## 春闘再生は「要求に自信」をもつことから

—— 青年団結集会で考えたこと ——

つきそいのつもりで参加した全国青年団結集会往路の車中で突然、「あんた座長になつとるからな」と通告を受けたので、心の準備もないままに分散会に出た。これがかえって良かったのかもしれない。座長心得に従って進めてぶつかると、すぐにグループ討論に切りかえて、なんか、おつてもおらんでも同じような無責任な座長やったけど、いろんな話を聞くなかで少し先が見えてきたように思う。

## 「あきらめの状況」が実態

生活実態からの賃金要求は、どこでもぶつかっていて、あきらめ状況とも言える実態だった。

「上の方で決まる低額要求をどうすることもできん」、「どうせ取れるわけないと本音で思っている」など割切った発言でひとまわりした。なかには組合役員をしている人がいて、「物価上昇が何%とか、電卓たいて決めた安い要求を、生活ミニマム要求、これがハドメだ」と自分が説明して歩く、けどなんかすっきりせん」と「すっきりしたい」ことを求めている。そりゃ「すっきりせん」わけである。「現場を歩くと、残業せんでも生活できるように、残業分だけでもなんとかしてー」と言われるのだから、そんな声、押さえつける方がまちがった。けれど、その声が上部に届かない。点検手帳につけて出したナマの自分の要求が職場で討論できていない。こんなことえらそうに書いている自分自身できていないが、討論できている人も役員から「安い要求でも、とりあえず要求どおり実現してから」と説得されると、「自分としてはまったく不満だが」引き下がっている。役員の方もそんな職場の闘争実態をよく知っているもんだから、機関会議で孤軍奮闘してみても「そんなこと思っとなのはあんたぐらいやで」と一蹴されてしまう。相手の方が役者が一枚上である。

こうしてアキラメ状況が作られていることがわかった。でも資本家は安心してはいない。なぜなら生活はわれわれ自身をけってアキラメさせてくれないからである。アキラメきれない、なんとかしたいから、全国から一萬二〇〇〇人も集って交流しておる。それはけってムダな徒労に終わるわけではない。

## 欠ける要求への自信

そこで、こちらに迫力がないところをさぐってゆくことにした。

「独身貴族と言われる。これが心にひっかかる」、「自分の要求は希望であって最低限の要求になっていないからね」。これじゃ説得されてしまうわけだ。でも具体的なかみを聞くと考ええるヒントが見つかるものだ。

「三〇すぎでまだ独身なんですよ。結婚したいし、それには貯金もせなかんしね。また、結婚のことを考えると今の安アパートを出たい。壁がうすくて隣の住人に気をつかって生活してるんです。すきま風もひどいしね。もう少しましなところに移りたい。デモネ、実は自分はレコード聞くのが楽しみなんです。音楽ってきれいやしね、好きなんです。コンサートなんか行くといひ席は五、六千円もするしね。レコードなら何度も聞けるからね。それで月に一万から二万はレコードを買ってるんですよ。ステレオも一〇年くらい前に三〇万するのを、今買ったら一〇〇万くらいかな、そいつを持ってるんです。」

この時、彼は照れ臭そうな顔をしている。他の人も「僕はゴルフが趣味で先月は三万五

千円も使った」、「実は三万円もするスキーを買っちゃってね」と口々に出てくる出てくる。どちらかと言うと、頭をかきながら、ふし目がちにボンボンと。みんなの態度は明らかにこう言っている。「ぜいたくではないか、分不相応ではないか」。こう思って半分びくびくしながら、正直にしゃべっているのだ。

これは、もう少し展開するなら、「その『楽しみ』、『趣味』に使っている金を他の生活改善要求の方にまわせば、バカでかい要求にならずに済むじゃないか」と追及された時、「やっぱりそうかな」と思って引き下がってしまふ根拠として十分である。

自分の要求を迫力ないものとしていた原因は、つきとめられた感じである。

分不相応とかぜいたくとかいう感情は、自分が人間として自信を持てば消えてゆきます。僕たちは、貧乏たれのこせがれで、頭もあんまり良くないもんで官僚やエリートにもなれずと、ふだんは劣等感を持たされています。ところが、社会の富はみな働く者が作るのです。作った者が消費して悪いわけじゃないですよ。むしろ、富を作っていない者が作った富をぶん取っている今の世の中の方がさかだちしているのだということを知るや否や、僕たちの態度も変わって来ます。

まるでそれまでの態度を知っている人達から見れば二重人格のように見えるでしょう。生きてゆく上で楽しみは必要だ。何のための人生だ。誰のため人生なんだと、思えてくるから不思議です。すると、自分の要求に臆することもなくなってくるということが見えてきました。

「どうせ取れるわけない」という気持ちも少しは変わったものになってきました。もちろん、これだけの大量失業で賃金を引き下げる重しがはたらいているときに大幅賃上げができるなどと断言する人がいたら、そいつは嘘つきに決っています。しかし、小幅しか取れないからと、闘争を放棄すれば、どうなるか? 「必ずや、何らかのより大きな運動を起すための彼等自身の能力を失うであろう」とマルクスは教えているのです。大幅賃上げ要求は、それが実現できるかできないかという問題ではなく、社会の主人公である働く者が人間らしく生きてゆくための物質的な裏付けを考える作業です。もし、大幅賃上げの見込みがうすいとしたら、賃金とはそもそもどのような法則で決まってゆくのかを、もっと深く勉強してゆく他ないということになります。

要求は大幅でも、取れるのは小幅になるのはなぜかを働く者が学びはじめたら、その時こそは、世の資本家どもの顔が青ざめてゆく番なのです。

### 職場実態はどこでも同じ

二日目は、職場実態交流をおこないました。労働条件でぶつかっていることも、賃金要求でぶつかっているところと似たり寄ったりでした。

年休 平均 三・五日、僕も二日取ったけど、病気の時取っただけ。忙しい。年休どうしたら取れるのか悩む(労金)。

環境 夏は暑くて四〇度にもなるのに扇風機は工場に一つしかない。冬はマイナス五度にもなる。古い工場なのでなんとかしてほしいけど、今まで会社は赤字だったから設備投資はできないと言われてしまふ(電機)。

残業 一時間に満たない残業がサービス残業になっている。それに予算を越えた分もサービスさせられる(労金)。

三ヶ月で一二〇時間を越えてはダメという組合と会社との協定もなしみたいなもの。自分は月に四〇時間〜六〇時間、ひどい人は一四〇時間賃金が安くて残業せんといかんけど、残業しすぎや(電機)。そういう忙しいすぎる職場がある一方では……

応援 半減生産で余剰人員が出て、他のラインに応援に行かされる。そこで部品まちが

えたりしてどなられる。応援してもらって何やと頭にカリカリくる。でも、自分のラインで作る製品が売れなければ、どうしようもないのじゃないかと思ってしまう。下 請 自分たちが仕事やりやすいようにとはじめた職場要求なのに、いつの間にか塗装とかの嫌な仕事に社外工が入ってきて今では二〇〜三〇人もいる。これじゃ自分たちの仕事が決められるんじゃないかという声も出てきた（全金）。こんな中でもいっしょけんめい会社のこと考えなさいと……

提案制 一年に一回、賞金までつけて誘ってくる（労金）。忙しくて提案どころじゃないのに、提案のない職場には見せしめの黄色いダルマが置かれる（電機）。

KYT いろんな作業をしているマンガを見せて、この中にどんな危険があるか、どうしたら良いかを考えさせられる。でも、そういう会社が、これまで二人でやっていた屋外線張りかえを一人でやりなさいと言っ（電通）。まったくドジなKYTもあったものがある……。

### 焦点は赤字—どう考える？

さて、こうした職場実態とぶつかり点を整理してゆく上で、赤字に焦点をあてて考えてみた。困窮の人は、赤字はへっちゃらであった。独占資本の得意先となってどんどん経営赤字をふくらませたのが政府であることが明白だから、今の首切り攻撃配転攻撃は、いわば無実の罪を押しつけられたものだ。ところが民間の人は、「赤字だとしようがないべ」と考えさせられている。自分たちが一生けんめい作ったのに、なんで売れ残ってゆくのだろうか？ また一方では、したくもない残業をバンバンと押しつけられて、なんでこうも忙しくなくちゃいけないのだろうという人がいる。

しかし、いつかはこの製品も作りすぎになるに違いない。そうしたら売れ残った製品の山を横目で見ながら応援ラインに行かされるに違いない。このからくりをよく考えてみないとばかを見る。会社が働け働けと押しつけて目いっぱい残業して働いた拳句、君ら働きすぎやったら製品が売れんようになった。今後はヨソへ応援に行ってくれ、と言うのはどうか？ 会社は損になりそうになったら、いつでも労働者をいけにえにささげて、又クヌクとしておるのじゃないか？ 雇主と労働者の関係は *them and us*、奴らと俺たちとは違う。

俺たちが働くことによってのみ、奴らは大金持になってゆく。その俺たちはひどい扱いを受けて、こき使われている。クビにもなる。会社の赤字を考えると、こんなところにたどりつく。

分散会の中で、こうしたことを充分討論したとは言えないけれど、フリー討論の中で煮つまりつつあったのは、こういう赤字の見方、世の中には大金持と貧乏人がおることの確認であったように思う。

### 主人公は組合員

参加者の感想に「組合員を納得させる立場だと思っていたが、基本は組合員だと思った」というのがあって、するどい指摘に痛いところを突かれた思いであった。

ただ残念なのは、本当はあるはずの職場病の話がほとんど出なかったことで、生き残り競争の激化がどれほど進んでいるのかがうかがい知れる感じがした。

集約会場に運んでくれるバスに乗る前に、分散会の一人と目が合った。「また来年も会いましょう」と言われ、ゾッとする思いであった。年とってきたし、これで全国青年団結集会に行くのも最後やと心に決めて参加しているのに、こっちの心のわからん人やなあと思ひながら、「えー」と、ウソをついてしまった。（兵庫・F）



## 向坂逸郎先生を語る

### 一人ひとりの努力が社会主義をつくる

関 光子

私が向坂先生の書かれたものを、まとまった本として読んだのは『学ぶということ』でした。この本の見開きには、「一九六五年二月十四日、加茂先生より贈られる」と書いています。きっと、成人式の祝いとして贈られたものと思います。中を開いてみると、所々に傍線が引かれ、書き込みがしてあります。その第一章の「まなぶということ」の中の一節、この流れはどこに向っているのか。いうまでもなく社会主義社会に。」という個所に、「ナゼコウハッキリ言イ切レルノカ？」と書いています。無理ありません。当時私は看護学校二年生、やっと科学的社会主義の基礎の基礎ともいうべき弁証法的なものの方、考え方や経済学を勉強し始めたばかりだったのですから。そしてこの本の一章を最も熱心に読み、何を、何のために、どう学ぶのかということ、臆気ながらも自分の中に掘み取ったようです。

あれから二十年、向坂先生のことを初めとして沢山の本も読み、先生のような生き方を素晴らしいと思い、また先生のもとに集まっている人達の生き方に多くのことを学び、かつその人間性に魅力を感じ、私もまた曲がりなりにも、大きな歴史の流れに沿った道を歩いてきたようです。

私達は日常生活の中で、さまざまな資本主義の思想攻撃に晒されており、社会主義をめざして闘い、生き続けることは非常に困難な状況になっています。迷いも生じ、現実的の不利益も受け、しんどい思いもします。けれども「この道」を歩き続けることは、本当に人間として価値ある生き方だと思えます。先生はその随筆や言葉の端々の中で、社会主義社会への道を一人一人が、それぞれの分野で、それぞれの置かれた立場の中で、それぞれの能力に応じた精一杯の努力を傾けて、学び、闘い、生き続けることを、繰返し繰返し言うておられるように思います。私も今、気持を新たにして、人生の後半生を、道を踏みはずさないように、歩き続けたいと思っています。そして次の世代の若い人達や娘達にも、心のゆたかさ、人生の喜びは、歴史を背負っているという確信からのみ生まれる」ということを学び取ってもらえるよう、手助けしていきたいと思えます。(松江市在住)

### 小学生のとき講演をきく

布 上 泰

いつも社会通信を送っていただき本当にありがとうございます。

向坂先生が亡くなられました。ちょうど六二年前の一月にドイツに留学された先生の死を、先生が学ばれたベルリンで知ることになりました。先生には身にあまるお世話以上の配慮をいただきました。中野・上鷲宮での七年余りの生活は、たんなる思い出としては語ることができません。

先生は常に若い人々に大きな期待をかけられていました。厳しいまなざしの中に、いつ

も人を包み込むような暖かさを感じたのは、ぼくだけではないでしょう。先生自身も若くあろうとされてきました。その飽くことのない探究心、知識欲を知る人は、何人も、すでに自分は学習からは卒業したんだ」などととても云うことはできないでしょう。

マルクス主義者は常に若い、どんなに歳はとっても、その気持ちはいつも爽やかな青春にある、ということを学びました。

しかし先生は同時に、いわゆる新しものがり屋では全くありませんでした。皮相に新しいものを追うのではなく、いつもその底には動じようのないマルクス主義への確信がありました。その目で物事の発展を見つめておられました。先生はどちらかといえば、少しく古いものを好まれました。それは全く、「懐古主義」とは無縁のものです。何が本物であるか、常に見ぬかれていました。

ぼくが小学校五年か六年のときです。そのころ親父は函館ドックに勤めており、両親につられて、函館に講演に来られた先生のお話しを初めて聞いたことがあります。小学生ですから難しいことは何もわかりませんし、覚えてもいませんが、先生が、松下幸之助は泥棒である、と言ったことだけは覚えております。子どもながらに大きな印象を受けたのか、そのことを学校の帰り、同級生に話したことも覚えています。

泥棒が政治家を雇い、警察を飼っている、泥棒が権力を握っているこの社会を変革するために、向坂先生は一生を送られました。いま泥棒諸氏は自分の「悪業」が悟られるのをおそれ、全労働者におそいかかっています。社会党の「思想」も買い取ろうとしています。総評も同じです。

この紳士面した泥棒たちをこの世から追放するために、わたしたちもまた一生を送るのだ、という決意を新たにしたいと思います。

(DDR在住)

## 向坂先生の「大書」

川原虎雄

私の家には先生の拝毫になる「一歩行きすぎても、眞理は過ちにかわる」と書かれた大書がある。タテ九五センチ・ヨコ七〇センチの紙に腕をふるわれたのは、「資本論」発刊百年のときである。

長崎市へ先生がおいでの際の宿泊所は拙宅ということもあって、私が無理をお願いしたものである。書き終わった先生は、「これは人の目のふれるところにおいたら、すぐ破るから」と申された。その後、先生が長崎においでになるときは、押入れ深くかくしたものである。

今、この大書は、先生の遺品となっていました。毎日のようにこの書を読みながら、先生のお姿を偲び、これから将来にむけ、「一歩行きすぎても、眞理は過ちにかわる」ことのないよう、努力する決心である。

## ◆ 編集部だより ◆

▽春闘の情勢分析が遅くなりました。今号では春闘問題を中心におきました。

▽次号では「反撃の条件」を特集します。今、必要なのは不安、苦惱、悩みを克服し、しっかりととした展望、そして自信と確信をもつことだからです。

▽現場は嵐のように攻撃されています。こうしたとき、私たちの目は職場の攻防に局限されがちです。それだけに、私たちはもっと広い視野が必要です。そうしてはじめて、職場の攻防のもつ意味が明らかとなるからです。

▽学習とたたかいはそのために必要なのです。